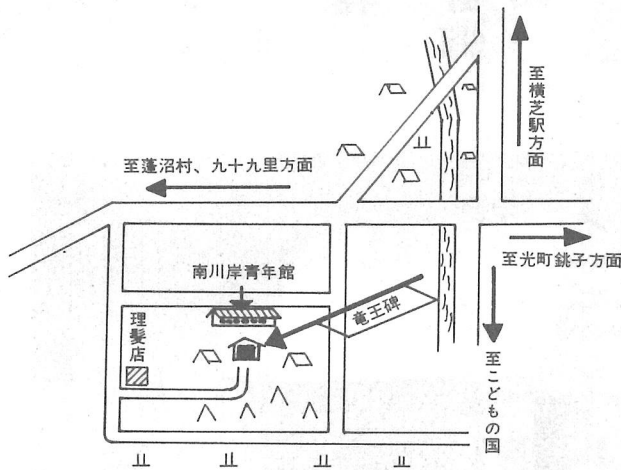


横芝の碑

(その三十)

―南川岸の八大竜神―



屋形南川岸青年館の裏に廻って見ますと、館を背にした一字の祠に気がつきませす。中には、竜神を祭る二基の碑が建っていて、その一基には、八大竜神宮と、豪快な文字が刻まれています。

八大竜神とは、難陀なんだ、跋難陀ばつなんだ、娑羯羅しやがら和修吉わしゆきち、徳叉迦とくしやが、阿那婆達多あなばたつた、

摩那斯まなし、優鉢羅うはつら、の八頭の竜神を総称するものといわれていませす。広辞苑等によりますと「竜は、りゅう、たつ、等と称し、海中、または湖沼の中に棲み、神秘的な力を有するという想像上の動物で、姿は巨大な爬虫類で胴は鬼に似る。深淵、海中に潜み時には、自由に空中を飛翔し、風雲を起し、雨を呼ぶ云々」と記さ

れています。積乱雲の底から、じょうご形の雲が降下して、地表や水面に達し、泥砂や海水、漁船、建物まで巻き上げるつむじ風を俗に竜巻たつまき、と呼んで竜が昇天する現象である。と言伝えられるていることは誰しも知っておられると思ひますし、源実朝の金塊家集に、

時により、過ぐれば民の嘆きなり、八大竜王雨止み給え
 という歌が載っていることも御存知の方が多しと思ひます。そんな風に昔から、竜神は、雨降りの神様として尊崇されてきていたようですが、南川岸の竜神様は、雨降りの神というよりは、漁に出た人

々の安全と、豊漁を祈願する神様のようです。このことについて、地元の皆さんは、「この碑は、昔の網元であった千神の海保という旦那が漁師の安全と豊漁を祈願して建てたもので、漁師仲間には大変信仰が深いものです。」

昔は、大晦日、一月十四日それに節分の三回、子供達が夜を待つて篝火を炎き、時には、古い守札や松飾等も焼き、その残り火で餅を焼いて食べて、一年間の無病息災を祈つたものです。また、竜神様にお供えした御神酒を持って各家を廻り、その神酒の振舞を受けたお宅から、幾何かのお賽銭を頂戴して歩くという風習もありました。子供達には、いまの様な組織だった子供会というものはありませんでしたが、神社の清掃奉仕や天神講等の様に、一緒になって行事をする集りがありました。その頃は、地引網も盛んであったし赤貝等も沢山採れていましたので、お賽銭も沢山供えられて、子供達の共同収入としては、充分すぎる位でした。これは、確か昭和十五、六年まで続いていたましたが、其後次第に廃れてしまいましたね。」と大要そんな風に話してくれました

○写真はその碑で、向って左の碑には、一番上に梵字らしいものが刻まれ、その下には、前にも記した通り、八大竜神宮と太く刻まれたその横には、壬午〇〇年二月吉日

と刻まれています。また向って右の碑には、正面に、海河一切経、等と刻まれ、左側面には院〇〇經〇羅〇日〇〇若有有情能於、此塔一番一草、札拝供養塔施、また右側には、此塔或一礼拝、或一名退塞地、獄門開菩提、塔〇〇〇、裏面には、正曆十一年酉七月吉日施主海保惣右衛門(〇〇は判読不詳)等と刻まれています。(本稿取材に当り、地元南川岸の皆さん、並に、施主海保惣右衛門の後胤に当る宮前海保忠さんの御協力を戴きました。)

◎おしらせ、前号横芝小校門協賛者の氏名について、「あの中に土屋武一先生の親御さんがいる筈」という御連絡を戴きました。早速先生にお伺いし、御一緒に校門の刻名を判読願う等の調査の結果、土屋久蔵という刻名は、土屋久吉が正しく、土屋先生の親御さんであることが確認できましたのでおしらせします。

(養護老人ホーム小沢所長寄稿)

